

巻頭言

自分で歩くこと、見ること、聞くこと

理事長 新谷 友良

毎年開かれる国際福祉機器展を見て、人間とは動物なのだということをしみじみと感じます。圧倒的な車いすや歩行支援器の展示にあふれ、聞こえに関係する機器の20倍、50倍の印象です。光合成をおこない自分で栄養分をつることができる植物とは異なり、人間も含めて動物は動き回ることができなければ生きていくことができません。そのような命にかかわるところから、動くことで人と交わり、スポーツや旅行を楽しむことまで、動くこと・歩くことの広さ・深さを考えると、国際福祉機器展の光景は当然すぎることもかもしれません。

今から5年前、障がい者推進会議が始まったころ、会議では「歩くこと、見ること、聞くこと」をどのようにして回復するかということあまり議論がされませんでした。障害を持った人は「歩く、見る、聞く」ことができないことを前提にして、周りが、社会がどのようなサポートをして、障害を持った人と一緒に生活していくかが議論の中心でした。それは障害に関する「社会モデル」として、いまさまざまな分野で進められている障害者への施策の中核的な考えとして認められる状況になっています。そして、そのような障害についての理解の広がりや、社会のさまざまな分野の弱者といわれる人が普通の人と一緒に暮らす「共生社会」のイメージを、少しずつ具体的なものにしてきている印象を持ちます。

一方、「自分で歩く」ということと「車いすの人が利用できるエレベーターがある」ことの違いを考えることは、「共生社会」の中身を考える上で、とても大切なテーマと最近思っています。ロボット機能を応用した人の動作を支援する機器は、介護に従事する人の負担を軽減する目的などで開発が進んでいるようですが、小型化された歩行支援機器は、寝たきりの人の自力歩行を促す有力な器械のように思います。ベッドの上で、24時間介護を受けている人が自力でトイレに行くことは、介護の問題を超えてその人の人間としての生きがい・尊厳に繋がる部分があります。

障害についての「社会モデル」的な考えの定着がまだまだの時点で、この点を強調することには問題がありますが、共生社会の原点が「人間らしく暮らす」ことにあると考えると、自分で「歩く、見る、聞く」ことの持つ意味を常に確認する作業は、とても大切なような気がします。